
恋姫無双～外史に降り立った悪魔狩人～

オルフェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜外史に降り立った悪魔狩人〜

【Nコード】

N9898X

【作者名】

オルフェ

【あらすじ】

ある日、突然のダンテに呼ばれ悪魔関係の依頼だと言うので嫌々ながらもDevil May Cryに呼び出されネロは駆けつける。

そこには古ぼけた鏡があり驚きの内容を語り出す…。

プロローグ（前書き）

ダンテやネロの口調の再現がかなり難しい…ご都合主義で恥ずかしい稚拙な文章で原作無視のオリジナルストーリーになってしまいかもしれません初めての投稿なのでどうかご容赦を…。

あゝ、マジで文才がない…。

ちなみに一刀は出ない予定です。

プロローグ

ネロ「アンタの話が本当なら、この骨董品の鏡が依頼をしたって言うのか？それも合言葉ありで」

“ Devil May Cry ”に突然呼び出されたネロは酷く機嫌が悪かった

ダンテ「ドラッグはやってないぜwほら、坊やにもちゃんと言いな」

『はっ、はい！伝説の魔剣士の血を継ぐ者よ！私達の世界を…外史を…救ってください！』

古ぼけた鏡が突然、光出したと同時に話し出した

ネロ「みたいだな…、悪魔絡みの依頼ってことはわかった。それで『私達の世界』ってのはどういうことだ」

『私達の世界“ 外史 ”は中国の三國志の武将が可愛い美少女だったら…以下省略』

ネロ「三國志か…、たしかクレドが好きで良く読んでたな」

ネロは、ほんの少しだけ寂しそうな顔をする

ダンテ「Ha！要するに過去でパレルワールドで可愛い子ちゃんいっぱいの世界ってことか！Chinaに行くのも初めてだ！」

対照的にダンテは子供ようにはしゃいでいる

『依頼を受けて頂けますか？報酬は貴方達が望む物を差し上げます』

ダンテ「こんな楽しそうな依頼は受けない訳にはいかないぜ！報酬はピザとストロベリーサンデーを一年分だ」

即答だった…借金をチャラにするとかいろいろあるだろダンテ…。

r z

ネロ「図々しいことは百も承知だけどフォルトウナの孤児院のガキ達の誕生日とクリスマスにプレゼントを頼めるか？キリエはガキが笑ってと本当に嬉しそうに笑うから…な」

ネロは頭を掻きながら少し頬を少し赤くして答えた

『失礼ですが…たったそれだけでいいのですか…？』

ダンテ「ガキの頃からの夢だったファンタジーの世界に行けて報酬は大好物一年分、貰いすぎなくらいだw」

ネロ「あんたにとっちゃ下らないかもしれないけど俺にとっての一番だ。」

『しかし、それだけでは私の気がすまないと云うか…なんと言云うか……』

ダンテ「アゝ、って言われてもなあ…」

ネロ「じゃあ弾丸の補充頼めるか…？大昔だから銃なんてないだろうし、こっちから持っていくにしても限りがあるしな」

『いくら射つても弾切れしないようにすればいいんですね？チチン
プイプイナンチャラカンチャラ…はい！これで無限に射てるよう
になっているでしょう』

ダンテ「ハッハー！マジでファンタジーだぜ！」

ネロ「ハハハ、マジか…便利な力だな……。まあいい、仕事をしに
行くか」

『それでは私の力で貴方達を外史に送ります。鏡の光に飛び込んで
ください…』

ダンテ・ネロ「OK」

『最後に一つお訪ねします…なぜ、私を信じてくれたのですか？罠
の危険もあったというのに』

ネロ「最初は正直言っただが、俺の勘がアンタが嘘を言っ
てないってからな、先行くぜ」

ネロがぶつきらぼくに言い放ち光に飛び込んだ

ダンテ「まっ、仮に罠だったとしても関係ない」

ニヤリとニヒルに笑ったダンテが言い放つ

『それはどういふ』

ダンテ「刺激があるから人生は楽しい、そうだろ」

そう言い残し光に飛び込んだ

『誇り高き魔剣士の血を継ぐ者よ…どうか御武運を』

こうして誇り高き魔剣士の血を継ぐ者が二人のデビルハンター（悪魔狩人）が外史に降り立った

ブローグ（後書き）

ダンテやネロの使ってほしい台詞を募集します。
自信ないですけどリクエストには答えたいです…頑張ります

三人の少女（前書き）

うーん、難しいです。

自分の文才の無さに泣けてくる…orz

ダンテは次回、登場予定です。

三人の少女

ネロは眩しい光を感じて目を覚ました。

起き上がり辺りを見渡すと、なにもない荒野、どこまでも広がっている。錯覚するほどの荒野であった。

「しけたところだぜ… ダンテは気にするだけ無駄だなダンテだし。」

一言呟き溜め息をつき、今の状況を整理しようとしたとき自分に向けられている視線に気づいた。

「コソコソ覗いてないで用があるなら顔見せな」

ネロはホルスターから取り出したブルーローズを左手に構え、眉間に皺を寄せながら不機嫌そうに荒野にある大きな岩に問う。

「あ、あはは。バレてました？ 右手… 怪我してるんですか？」

桃色の髪をしたチョット天然そうな少女が苦笑いしたあとギブスで吊られたネロの右腕を見て心配そうな顔で問う。

「怪我してるわけじゃない、でも俺の右手はあんまり人に見せたくなくてな… 心配してくれてありがとよ」

ネロは桃色の髪の少女の目を真っ直ぐ見て答え、ブルーローズをホルスターに収めた。

「いえいえ！ お礼を言われることなんてなにもしてませんし！ / /

／
」

手を顔の前でブンブン振りながら照れながら否定する。

「俺に敵意はない、悪いな余計な気を使わせちゃまって」

桃色の髪の少女は全く気づいていないが、後ろにいる美しい黒髪の長刀を持つ少女と巨大な矛を背負った女の子は、ネロに敵意がないことが解ると構えていた武器をおろした。

「見たことない服に変な鉄の筒、変なお兄ちゃんのだ！」

「コラッ、鈴々！初対面の人に向かって失礼だぞ！すみません…ゴホン、私は姓は関、名は羽、字は雲長と申します」

「私は姓は劉、名は備、字は玄德だよ！よろしく」

「鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ」

「姓も字もない、名はネロ、ここから遠く離れた西のフォルトゥナって国から来た便利屋だ、仕事の依頼があつてさっきここに着いたばかりだ。よろしくな、劉備、関羽、張飛…でいいか？」

「はい」ネロさんの国では姓や字がないのが普通なんですか？」

「姓はあるやつもいる字ってのはない、それと俺は孤児院育ちだから姓が仮にあつたとしても知らねえ」

「うっ、うめんなさい…！」

ガバツ！つと頭を下げて劉備という少女が謝る。

「気にするな。それで、あんた達はなんでこんななんもない所にいたんだ？」

「私が説明します。私達はこの乱世を鎮めるために旅をしているのです。そして菅路という占い師が人の世を救いし伝説の魔剣士が天より参られるという予言を出し、それを探しているのです」

「伝説の魔剣士？」

関羽の話に劉備は続ける。

「でも、なかなか見つからないんですよ！わかってるのは身の丈程のつかい黒い骸骨の剣と細い片刃の剣を持つてることだけで…、最初はネロさんかと思ったんですけどネロさんの剣は骸骨の剣じゃないし…はあ」

「残念だったな…（骸骨の剣はダンテのリベリオン、細い片刃の剣は俺の閻魔刀のことか？）」

「鈴々は疲れたのだ！魔剣士なんてお伽噺の棲羽亜陀くらいしかないのだ！本当にいるわけないのだ！」

「鈴々、弱音を吐くな！きつというと思う…」

（スパイダの伝説まであるのか、ダンテが知ったら苦虫を噛み潰したような顔するんだろうな）とネロは心の中で思った。

つと、三人がネガティブオーラ全開で撒き散らし始めたのでネロは話題を変えた。

「さつき違う名前呼びあってたけみいたが、あだ名みたいなもんか？」

「あだ名じゃなくて真名ですよ、あつ、真名は両親や親族の人に貰うから…」

「いや、俺の国にはマナ？なんてもんは元々ない」

「姓や字だけじゃなくて真名もないのだ？変な国なのだ！ビックリなのだ！」

「それは真名と言って親しい間柄でしか呼ぶことの出来ない神聖な真の名のことで、親しくない人が許可を得ず、勝手に呼んだりしたら殺されたりしても文句は言えないのです」

「OK、参考になった。真名ってやつで話しかけてブツ殺されなくてよかったぜ（殺される気はないけど）」

肩をすくめ、苦笑しながらネロが答える。

この時、ネロは心の中で思った。

（女運の悪さSSSのダンテなら間違いなく真名で呼ぶ、あげく挑発しまくって事態をややこしくするな。）

ネロが心の中で思ったことは、直後に現実にかかることになる…。

赤い男（前書き）

恒例行事です。

赤い男

この地について情報が欲しかったネ口は今から町に行くという劉備達に同行することにしたのだが…。

「ネ口お兄ちゃんは背が高いから遠くまでよく見えるのだ！凄いだー！」

「鈴々！初対面の男性に肩車など失礼にも程があるぞ！ああ、ネ口さん申し訳ありません…」

「髪を引っ張らないようにしてもらえると、ありがたいんだがな…」

「鈴々ちゃんよかったね♪」

「桃香様も笑ってないで止めてください！」

「愛紗お姉ちゃんが嫉妬は見苦しいのだ〜！」

「しししっ、嫉妬などしてない！！！！／／／」

「D a m n i t ……（どうにでもなれ）」

美少女が両脇にいる正に両手に花、さらに頭に美少女という普通なら超がつくほど羨ましい状況なのだが、閉鎖的なフォルトゥナで育ったネ口はこの慣れない、姦しさに少々…いや、かなり精神的にまわっていた。

「ハア…（女難はアンタの役目だろうがオッサン）」

深い溜め息を吐きながらネロが心の中で愚痴ていると、肩車されていた張飛が突然騒ぎだした。

「大変なのだ！真っ赤な服を着た男の人が賊に襲われてるのだ！！」

「ほっとけ、真っ赤な服の男なんて間違いなく頭がイカれてる無視しとけ（この状況でアイツにあつたらストレスで胃に穴が空きそうだ）」

「ネロお兄ちゃんは腰抜けなのだ！見損なつたのだ！」

張飛はネロに怒鳴ると頭から飛び降り走っていった。

「鈴々の言う通りです！力無き人が襲われてるのに心は痛まないんですか！貴方には失望しました！！」

関羽は顔に露骨に怒りを浮かべながら、急いで張飛の後を追った。

「襲われてる人が目の前にいるのにほっとけだなんて酷いです！たしかに乱世では力の無い人が悪いって言う人もいます、でも…」
劉備は僅かに目に怒りの意思を込めながらネロに詰め寄る。

「わかった、俺も行けばいんだろ…ハア」

ネロはガツクリと項垂れ、この世界に来てから何回目になるか解らない大きな溜め息を吐いた後に言葉を続けた。

「荒野のド真ん中に女をたった一人で置き去りにするなんて出来ないしな」

「えっ！？あははは…」

劉備は回りをキョロキョロ見回して自分が一人取り残されたことに

気付き、気まずそうに笑った。

「張飛達に追い付く、悪いな劉備、少し…跳ばすぜッ！」
と言い終わると同時に劉備を抱え（所謂お姫様抱っこ）疾風の如く
ネロは駆け出した。

「何を！？えええええ！顔が近つ、でもネロさんならあんまり嫌じ
やな…／＼／＼つて、速い怖い降ろしてええええ…！！！」

異世界に着いて目が覚めて早々、ダンテはチビ・デブ・ノッポのチ
ンピラ三人組に絡まれていた。

張飛が見たのは、ちょうどその時だった。

「かつ、金になりそうな物をよこすんだな！そしたら命だけは助け
てやるんだな！」

「兄貴、その剣たぶんかなりの業物だぜ」

「俺達は黄巾党だ！命が惜しかったら（ry」

2メートル近い長身、鍛え上げられた肉体のダンテに多少ビビりな
がらも三人組は精一杯の虚勢をはる。

すると、ダンテは余裕の笑みを浮かべ素直にリベリオンを地面に突
き刺す。

「持ってけよ、いいぜ」

「へっ、物分かりが良い野」…重ッッ！チビ、デブ手伝え！」

「もっ、持ち上がらないんだな」

「んぎぎぎぎ！マジかよ…」

持ち上がらなかった…。

「いらないんなら返してもらっ、悪いな」そう言つとダンテは軽々とリベリオンを背中に担いだ。

「もう謝つても許さないんだな！！」

「ブツ殺してやる！！」

「こつちもスラムと大して変わらねえな。Hey！Common w
inp！（来な、ノロマ野郎）」

ダンテはボクシングのシャドーをしながら挑発する。

「意味不明なこと言いやがって！三人同時に行くぞ！せーのっ！」

このあと三人の賊は張飛、関羽が到着する頃には既にボツコボコにされていた。

「燕人張飛ただいま参上！鈴々が来たからもう大丈夫なの…だ……」

「これはいつたい…どういう…」

「Ha-ha！あんまり見つめるなよ照れるぜ、まっ！良い男だから仕方ないか」

「真面目に相手にするだけ無駄だ、やっぱりアンタか…ダンテ。降りな、劉備」

「あ、ありがとうございます…（顔が熱いよお）／＼／」

「ネロさん（お兄ちゃん）の知り合いですか（なのだ）！？」

「忌々しい腐れ縁の同業者だ」

「さつきは酷いこと言っちゃってゴメンなのだ…」

「なぜ一言、私達に説明してくれなかったのですか！？」
やや厳しい口調で問いかける関羽であったが。

「説明する時間があつたか？まあ、いいけどよ」

「も、申し訳ありません…」

ネロの話も聞かず、しかも劉備まで置いて飛び出してしまったことを思いだし正にグウの音もでない。

「鈴々ちゃんも、愛紗ちゃんもあんまり落ち込んでたらネロさんが困っちゃうよ」

「愛紗って嬢ちゃんが困ってるぜ、おっと！」

「貴ッ様あああ！！許さん！！！！」

ガキイイイン

真名を言われて激昂した関羽の一撃をダンテはいつの間にか片手に持ったリベリオンで防ぐ。

「Ha-ha！なににキレてるかは知らないが、最ッ高だ！危険な女は嫌いじゃない」

「どうして…どうして、あの人は愛紗ちゃんの真名を呼んだんですか！」

「ああ、アイツも今日ここに着いたばかりだから真名のことなんて何も知らないな」

「愛紗ちゃん落ち着いて！鈴々ちゃん！ネロさん！愛紗ちゃんを止めて！…鈴々ちゃん？」

「ほっとけ、剣で刺したくらいじゃ死なねえよアイツは」

「スパイダ…あのオジサンの持つてる骸骨の剣、絵本で見たのと同じなのだ…オジサンはきつとスパイダなのだ！」

「Hey！お嬢ちゃん俺はイカしたお兄さんだ！それと生憎、親父は親父じゃない、ダンテだ。ところで坊や、なんで黒髪の嬢ちゃんが怒ってるのか教えてくれよ！可愛い娘に嫌われたままじゃ寝付きが悪いんでね！発音が違ったか？」

「親父って…スパイダはダンテさんの…お父さん！？」

劉備は開いた口が塞がらなかった。

ビュン！ビュン！ブオン！

関羽から繰り出される青龍円月刀から繰り出される嵐のような斬激

は全て虚しく空を斬る。

「アンタが読んじまったのは真名ってやつで、本人が許した相手以外が勝手に読んだらブツ殺されても文句言えないくらいに失礼になるんだってよ、イカれたオッサン」

「アー、なるほど…嬢ちゃんが怒るのも当然ってわけか」

「ハアアアアア！！（この人は私ごとでは想像も及ばないほどに強い…しかし、せめて一太刀！全てをこの一撃に！！）」

その関羽の全身全霊の一撃は恐ろしいほど呆気なくダンテの体を貫いた…。

赤い男（後書き）

いや、戦闘描写…難しいですね。

ポリシーは女子供には優しく（前書き）

無駄に長くなってしまった…。

若干…むしろかなりキヤラ崩壊してます。

「こつちに来て早々、可愛いBabyちゃん三人とデートなんてなかなかやるな。キリエの嬢ちゃんも苦勞す「違う」冗談だ、ムキになるなよ」

ネロがこめかみに青筋を浮かべながらレッドクイーンに手をかけると、ダンテはまいったといった様子で肩を竦めた。

「H a - h a ! 俺だけ仲間はずれなんて水臭いぜ、坊や！俺はダンテ、“ Devil May Cry ” って便利屋をやってる！よろしく、お姫様」

ダンテは軽く自己紹介すると劉備たちにウィンクした。

「貴様！化生の類いか！逃げてください桃香様！鈴々！桃香様を守れ！」

「惜しいな、半分正解だ。正確には半人半魔、悪魔と人間のハーフ」

「はーふ？」

「悪魔の親父と人間の母さんとの間に生まれた間の子ってことさ」

「悪魔だと！人を謀るのもいいかげんに！えっ、なんですか桃香様？」

「愛紗ちゃん、落ち着いて…聞いて。その人は…ゴニョゴニョ」

「見慣れぬ異国の服…骸骨の…剣…魔剣士スパーダは…悪魔でありながら…人間の見方…息子…なら私は…まさか…そんな…予言の…」

劉備の話を聞いた関羽はどんどん顔が真っ青になっていく。
関羽が顔面蒼白を青ざめ肩を震わせるなかダンは張飛をからかって遊んでいた。

「ダンテおじちゃんのお父さんがスパイダなら、おじちゃんも魔劍士なのだ？」

「親父と兄貴は魔劍士だったが俺は銃を使うから正確には魔劍士じゃねえな。それと俺はまだ、おじちゃんなんて呼ばれる歳じゃないぜ、小さなお姫様」
そういうとダンは芝居がかった大袈裟な礼をする。

「鈴々は小さくないのだ！鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳って名前があるのだ！」

「そいつは悪かった、よろしくな」

「ダンテお兄ちゃん、兄さん、兄者…ピッタリこないのだ…」

「呼び捨てでいいぜ、張飛」

「じゃあ、鈴々はダンテって呼ぶのだ！ところでその鉄の筒はなんなのだ？ネロお兄ちゃんもそんなの持ってたのだ。鈴々、気になるのだ」

「どういうことだ、坊や？」

「ここは俺達の世界とは違つみたいたが大昔の中国、銃が発明される前なんだろ」

「なるほど…これは銃っていう武器でな、ガキが持つには早すぎる。もっと安全なのをお姉ちゃんに買ってもらいな」

「鈴々はガキじゃないのだー！怒ったのだ！避けるなのだ！」「張飛は顔を真っ赤にして蛇矛をブンブン振り回すが全て…空振りした。

「H a - h a ! おつかねえ姫さんだ、機嫌直してくれよ」

そんなこんなでダンテと張飛はすっかり仲良く(?) なっていた。そんなこんなでダンテの誤解は解け、互いに改めて自己紹介をした。

「申し訳ございません…魔剣士様に斬りかかるなど言語道断、弁明の余地也没有せん」

関羽は肩をワナワナと震わせ土下座した。

「美人に涙は似合わない可愛い顔が台無しだ、それに次に踊るならベッドの中にしようぜ」

ダンテは全く気にしていないという様子でウィンクをして答えた。

「びっ、びび美女などとお戯れはよしてください…わたしのようない武骨者など…／＼／」

関羽は真っ赤になった。

「ところで、この世界でのスパイダ伝説、それと予言のことを教えてくれ」

ダンテは初めて真剣な顔をして劉備に訪ねる。

「はっ、はい。まず悪魔でありながら正義の心に目覚めた魔剣士ス

「パーダは…」

少し緊張した様子で劉備が話し始めたスパードの伝説は、ダンテやネロが知っているものと時代や時期に若干の誤差があるものの似通っていた。

「ったく、別の世界まで来て親父の尻拭いとは泣けてくるぜ…」

「別の世界ってなんなのだ？」

「俺でもよくわかんねえな。まっ、そこで俺と坊やはこの世界を救うって依頼を受けちゃったのさ」

「ダンテさん…ううん、ご主人様！」

「おいおい、俺にそんな呼ばれ方されて喜ぶ趣味はないぜ」

「私達に力を貸してください！！！」

劉備は強い決意を内に秘めた瞳でダンテを見る。

「まっ、美女の頼みだ。内容次第だな」

「戦えない、力なき人たちを守るために…。力があるからって好き放題暴れて、人のことを考えない悪魔みたいなやつらをこらしめるために！みんなが笑って暮らせる世のために！」

そう言っ劉備が頭を下げると、関羽、張飛も頭を下げた。

「アー…、悪いが断る。悪魔なら大歓迎なんだが人間同士の戦争なんて興味なくてね。まっ、気が向いたら手伝ってやる（憎しみの集まる戦場なんかには悪魔は集まりやすいしな）」

「そう…ですか…」

断られた三人はションボリしている。

「そこにスパイダの血をひく騎士様がいるんだ、そっちに頼みな」

「「「えっ!?」」」

「おいっ…、勝手に話を進めんじゃねえよ」

「右手も閻魔刀も見せてないだろ、見せてからの反応で決めたらどうだ？」

「Fuck! (クソつたれ)」

ネ口は眉間に深い皺を浮かべてギブスを右手のギブスを外した。

現れたのは人の物とは思えない悪魔の右手。

そして右手から“閻魔刀”を取り出した。

「「「……………」」」

一瞬の沈黙。

それを破ったのは張飛だった。

「かつ、格好いいのだ! 鈴々もそれほしいのだ!」

「その右手ってなんでも入るんですか? 私よく物なくすからあったら便利かな」

テンション上がりまくりの二人。

関羽は

「防具として使い勝手がよさそうな…それより、あの剣かなりの業

物の…」

自分の世界に入りブツブツ呟いていた。

「…怖くないのか？」

ネロの予想の遙か斜め上をいく反応に呆氣にとられていた。

「…なにが（ですか・なのだ）？」

「ネロさんはちょっと怖いけど優しいし。ネロさんはネロさんだよ
♪ あっ、いけないご主人様っていわなきゃ！」

「ご主人様は絶対に却下、全力で拒否する。ネロでいい」

「H a - h a ! モテモテだな坊や！」

「黙ってる！」

「えっと改めて私の真名は」

「とりあえず町についてから話そうぜ…」
心底疲れたといった表情でネロが呟く。

「…あっ…」

三人は町に行くことをすっかり忘れていた。

ポリシーは女子供には優しく（後書き）

なかなか話がすすまないです、はあ…。

ダンテの魔具もどんどん使っていきたいんですけどね。
やっぱり文を書くのって難しい。

お人好し

ネロとダンテは劉備たち三人の案内で無事に町にたどり着くことが出来た。

道中、様々な情報を交換しあい、また三人から二人は真名を託された。

全員空腹だったので町の飲食店で大量のメニューを注文をした、テーブルの上にはたくさんの料理が続々と運ばれてくる。

注文した後で、重大な問題に気付いた。

「どうしよう、愛紗ちゃん…」

「この店主と交渉して注文した品々の値段分、働くしかありません…」

「鈴々たちは、お兄ちゃん達がお金いっぱい持つてると思ったのだ…」

三人の財布の中身は雀の涙、財布をひっくり返してみたが、悲しいかな小銭が数枚しかない。

謂わば、“お財布 must Die!”の状態である。

「こっちに來たばっかなんでトマトジュースをかう金もなくてね」

万年金欠状態のダンテにとっては普段通りなので全く慌てていない。

黙って席を立ち店を出ようとするネロに鈴々と愛紗が突っかかり、桃香が捨てられた子犬のようなすがるような潤んだ目で見える。

「ネロお兄ちゃん！どこにいくのだ！」

「私たちは一蓮托生、一人だけ逃げようなんてひどいではありませんか！」

「ネロさん、見捨てないでください」

「なにも注文してないし、出された水すら飲んでない俺がなんで、お前たちの金を払わなきゃいけないんだ、アツ？」

ノリノリで桃香のお勧めを注文したダンテと違って、ネロは悪魔的な勘の良さで、本当は空腹ではあったが全て「いらない」と言っただけで断っていた。

つまりネロは四人が注文した代金を支払う義務が全くない。

「……」

至極真つ当なことを言われ、しかも二人にタカろうとしていた三人は罪悪感からかグウの音も出ない。

「じゃあな」と言っただけで四人を残しネロは店を去ろうとしたのだが

ガシャン

という陶器の割れる音に足を止めた

その音の聞こえた方を見ると、フリフリのフリルの着いた可愛らしい服を着た店員と思わしき三人の少女が見るからに頭の悪い五人の酔っ払いに絡まれていた。

「うっせえな……」

ネロが吐き捨てるように呟くと隣から出てきた中年の女性が話し始

めた。

「あいつらはこの辺で悪さしてる賊だよ。客や店の子に絡む、金は払わない、注意したら暴れる、嫌になるよ……」

「なるほど」

「やめときな、あつちには数もいるんだ。それにあんた右手怪我してんだろ？危ないよ」

「右手？使つまでもねえよ」

「ちつとぐらい触つたつて減るもんじゃねえだろ！」

「？？」「ここはそういうお店じゃないの〜！」

「まだ料理は来ねえのか！こつちは何時間待つてんだぞ！」

「？？」「他のお客様もおんねん！こつちも順番つてもんがあるんや！」

「？？」「他のお客様のご迷惑になられるような行動はお控えください」

「うつせえブス！傷女は黙つてろ！」

「ッ！」

身体中に傷のある少女が掌に爪が食い込むほど拳を握った。

その時、ネロが無表情で身体中に傷のある少女に歩みより顔をジッと見つめる。

「美人の間違いだろ？頭だけじゃなく目も悪いのかあんたら？」

「ヒューー！坊や！後で俺にもちゃんとその可愛いお嬢さんを紹介してくれよ！美女とお友達になるのが坊やだけってのは不公平だぜ！」
桃香たちと一緒に席に座っているダンテが大声で話しかける。

「？？」び、美じ！可愛いっ！？お、おおお客様ご冗談は止めてくだだささい…／／／／」

「「悪いがお世辞つてのは苦手だね」」
ダンテとネロの声が見事にはもった。

「？？」風ちゃん顔真つ赤なの」

「？？」照れることないで風い」

「女の前だからって粹がりやがって！格好つけんじゃねえ！！」

挑発されたあげく無視された賊の一人がネロに殴りかかる。

その拳をネロはあっさり左手で掴み、軽く力を込める。

レッドクイーンという大剣を左手一本で自由自在に振り回すネロの握力は尋常ではない。

当然、少し力を込めただけでネロに掴まれた賊の拳は悲鳴をあげた。

メキメキメキメキ

「悪いな、軽く握手したつもりだったんだがな」
ネロは皮肉タップリの笑みを浮かべ、手を離す。

「ギヤアアアア！手が…手があ…いてえよう…」

「俺たちに逆らって唯ですむと思う、プギッ！おふえのはがががががががが…」

賊の一人が言い終わる前にネ口は踏み込み左手で顔面を殴りつけた。殴られた賊は鼻の骨が砕け、歯が何本も折れている。

「What's
you say?
・ ・ ・
Huh! (なんか言っ
たか? ハッ!)」

「こ、この野郎!! ブツ殺してや、放せ! 放してください! あっあ
あああああ……」

もう一人の賊は剣を抜いて斬りかかったがアツサリと避けられ顔を掴まれ属にアイアンクローと呼ばれる技をかけられ失神した。

「残ったのはアンタだけだ」

ネロは“アニキ”と呼ばれていたリーダーらしき男の胸ぐらを掴み左手一本で持ち上げ殺気を込めて睨み付ける。

「ビツ、ヒイイ」

「Be gone! (失せろ)」

「たっ、助けてくれええええ！！！」

アニキと呼ばれた男が色々汚いものでスポンを汚しながら逃げていくと、残りの賊もヨタヨタしながらも蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

と同時に店内で歓声上がる。

「よくやった兄ちゃん！」

「胸がスツとしたぜ！」

「ねえねえ、あの人かつこよくない？」

「フン……」

ネロは照れ臭いのか鼻をならして静かに店を出ていこうとするが

「勝手に出ていかれちゃ困るよ、私の料理まだ食べてないだろ？」

さっき話したオバチャンが腕を組んで店の出入口に立っていた。

「残念だけど手持ちが無くてね」

なにも持つてないということをアピールするように両手を広げ肩を竦める。

「お代は結構、迷惑なチンピラをやっつけて店の看板に泥を塗るなんてこともなくて済んだからね、あっちに座ってる連れと一緒に好きなだけ食べてって頂戴！」

どうやらオバチャンは食べると言うまで一步も退く気はないようだ。

「それじゃ、頂くよ」

「美味しい料理をお腹いっぱい食べさせてあげるから、逃げんじやないよ！」

と言うとオバチャンは満面の笑みを浮かべながら厨房に向かって駆けていった。

「まったく、フォルトウナでも、この世界でも、本当にお人好しに

は縁があるな…」

ネロは幼馴染みで、姉のような存在であり、恋人でもある愛しい人のことを思いだし呟き…小さく微笑んだ。

女難の相（前書き）

なんか今回はいつも以上にグダグダです…。
うーん、関西弁難しい。

女難の相

ネロが桃香たちのいる席に戻ると、先ほど賊に絡まれていた少女たちが礼を言いに来た。

銀髪の真面目そうな少女が楽進、関西弁の少女が李典、ポニーテールの少女が于禁とそれぞれ名乗った。

楽進が礼と自己紹介をしているときにお腹が可愛らしく「ク〜」と鳴いてしまい一緒に食事をするようになった。

楽進も最初は顔を真っ赤にして遠慮していたのだが、続々と運ばれてくる美味しそうな料理の匂いと李典と于禁がもう席に座って食べ始めてしまった様子を見て申し訳なさそうに席に座った。

「青椒肉絲と酢豚とご飯おかわりなのだ！」

「甘いものは別腹なの、杏仁豆腐おかわりなの〜」

「そういえば、お腹いっぱい食べたのはこの旅で初めてかも…幸せだなあ」

「桃香様、恥ずかしいので涙を拭いてください」

「ダンテさんもネロさんも異国のの人なんか。ところで腰に差しとる武器はどうゆう武器なん？ごつつ職人魂を感じるわ」

「育ての親の婆さんの形見の品でね」

ダンテはアイボリーを取りだし銃身に刻まれた文字のスペルミスの部分“BY・45ARTWRARKS”を愛しそうに親指で擦った。

「ブルーローズは改造しすぎて元の形もわかんねえし、教団じゃ卑しいもの扱いだったんだけどな、そんなこと言われたのは初めてだ」
ネロは照れ臭いのかブルーローズをクルクル回しながら、そっぽを向いて答えた。

「やっぱり大切なもんなんやなあ。はあ、そうやなかったらバラス…分解してみたかったんやけどな」

「おつかねえ嬢ちゃんだ、これはいくら美女でもこれは渡せないぜ」
ダンテはおどけながらアイボリーを隠す。

「勘弁してくれ…」

ネロはブルーローズをホルスターに収めた。

「物は相談なんやけどネロさんの剣がどないな絡繰になつとるか見せ「断る」やっぱりそうなるわなあ…はあ。ってなんで隠すんや？ほんま堪忍！この通りや！意地悪せんと見せてえな〜！」

「沙和、真桜、少しは遠慮というものを…はあ」溜め息をつく楽進にダンテが話しかける。

「楽しんでるか？」

「は、はい…」

「そいつはよかった、食事に誘った可愛い女の子に溜め息なんてつかれたら凹んじまう…」

ダンテは芝居がかった大袈裟な泣き真似をする。

「ぐぐぐぐ冗談を、わたわた私は沙和や真桜とちがってぶぶぶ武骨者でかか可愛いなどなどどど…／＼／／」
楽進の顔が劇的に真っ赤に染まる。

「美女には溜め息よりも笑顔がよく似合う…楽しんでくれ、お姫様
chu!」

ダンテは楽進の手の甲にキスをすると、どこから取り出した一輪の真っ赤な薔薇を楽進に渡した。

「あうあうあう…／＼／」

炎獄の覇者と言われた悪魔と同じように全身から火でも吹き出すのかと思うほどに楽進は真っ赤になった。

「風ちゃん顔真っ赤なの…」

「ホンマ、こんな照れてる風を見るの初めてやわ」ダンテさんおもしろいわあ、いつもこんな感じなんか？」

「まあな…。それで、なんか用か？ジロジロ見られるのは嫌いでね」ネロは反対側の席へと鋭い視線を向けた。

最初に眼鏡をかけた委員長キャラの少女が口を開く。

??「星殿やつぱりばれてますよ…」

頭に奇妙なオブジェを乗せた金髪の少女は気まずいのか??「…………ぐう」

寝た。

そして白い浴衣のような露出の多い服を着た少女が挑戦的な顔で微笑んだ。??「御二人の実力に興味がありましてな、単刀直入にお

願いたす！私と一手、手合わせ願いたい！」

「ハア……」

ネロは大きく溜め息をついてダンテを見る。

「H a - h a - h a ! 参ったね、良い女に誘われたら断れない！どうやら本当にこの国はjackpotみたいだな、坊や！」
ダンテはハイテンションだった。

「俺に話を振るな……」

このオッサンに今すぐ魔人化バスターを力の限りかましたい……ネロは心の底から思った。

女難の相（後書き）

話がなかなか進まないのので確証はないですが、次回くらいに悪魔を出す予定です…。

悪魔狩人（前書き）

なんというか、ダンテ無双です。

仕方ないよね、ダンテだし…。

今さらですがフォルトウナの事件から一年後、ダンテは勿論のこと
ネロもかなり強くなって魔人化無しでも幻影刀くらいは出せるとい
う設定です。

御都合主義ですいません…。

悪魔狩人

「ネ口だ。頼みごとがあるんだったらまずは名乗ったらどうだ？」
明らかに不機嫌なネ口。

「優しくしなきゃモテないぜ、坊や。俺はダンテ、お見知り置きをお嬢さん」

ネ口を茶化しつつ芝居がかった大袈裟な礼をするダンテ。

「は、これは御無礼を。私は戯志才と申します」

「風は、姓を程、名を立、字は仲徳と申します」

「失礼。では、改めてネ口殿、ダンテ殿…私は姓は趙、名は雲、字は子龍と申す！一手、手合わせ願い」「待たれよ（つのだ）！！」「どちらかな？」

趙雲は鈴々と楽進を睨む。

「鈴々は張飛なのだ！ダンテとネ口お兄ちゃんと勝負するのは鈴々なのだ！」

「私は楽進。私たちも食事の後にでも御二方に手合わせを頼もうと思っていました。張飛殿との約束が既にある御様子、次の機会というわけにはいきませんか？」

「これほどの武を持つ人物と手合わせできる機会など少ない、楽進殿は次の機会などと悠長なことが言えるのですかな？」

「ッッ！」

「そうなのか？」

疲れきった表情でネロは李典と于禁を訪ねる。

「あー、堪忍な…」

「ごめんなさいなの…」

二人は気まずげに答えた。

「気にすんな、俺はやらないしな」

「ほう、それなりに容姿に自信はあったのですが、ネロ殿は女性からの誘いを断るのですかな？」

趙雲が挑発的な笑みを浮かべる。

「悪いな。生憎、俺は既に心底惚れてる女がいるんでね」

「こんな良い女からの誘いを譲ってくれるのかい、坊や？」

「年長者は敬え」あんたの言葉だろ？全員譲るよ」

「まさかダンテ殿一人で我々全員の相手をするおつもりか？自分の驕りで死んでも苦情は受け付けませんぞ」

趙雲は殺気と怒りを込めた視線がダンテに突き刺さる。

「心臓をブチ抜くくらいの刺激的な女じゃないと満足出来なくてね」本当に楽しくて仕方ないといった顔でダンテは笑う。

愛紗はとても気まずそうにそつと目を逸らした。

「鈴々がギツタンギツタンにしてやるのだ！」

「ダンテ殿、私たちが侮らないでいただきたい…」

「せやで、怪我しても知らんからな」

「ここまで言われたら私たちも退けないの」

「やるなら町の外でやってくれ事情聴取なんてされたら面倒だ」

「それもそうだな、こっちに來てまで借金なんてしたくない」

そう一言残すとダンテは殺気だつ趙雲たちと一緒に店を出ていった。残された店内で気まずい空気の中、ネロはゆっくりお茶を飲んでいく。

「私は武のことはわかりませんが星殿はかなり強いですよ、心配ではないのですか？」

戯志才はオロオロしている。

「その程度で心配しなきゃいけないような奴なら一年前にアイツと戦った時に俺が殺してる。もつとも、そのときは俺が今日の愛紗みたいに遊ばれたけどな…ダンテたちの様子を見に行くんだろ？美味かった『いつでも來てちようだい！あんたみたいな色男なら大歓迎だよ！』フツ、また來るよ」

ネロは苦笑しながらゆっくりと残りのお茶を飲み干し店長の女性に挨拶をして店を出ていくと桃香たちもそれに続いた。

「ネロさん、今日の愛紗ちゃんみたいって、えっ！まさか…」
速足で着いてきながら桃香が引き吊った笑顔で訪ねる。

「地面が陥没するくらい本気で何発もブン殴って串刺しにして磔にした」

ネロは、そのときの事を思い出したのか忌々しそうな顔をする。

「ダンテ殿はどれ程…強いのですか…」

愛紗が声を震わせながらも真剣な表情で問う。

「さあな、俺も本気のダンテは見たことがないんでね。少なくとも兵隊が何百万人集まっても、どんな罠を仕掛けられてもアイツは余裕で生き残るだろうな」

「…御二人は何者なのですか？風には只の便利屋さんには見えないのですよ」

程立が首を傾げながらネロを観察する。

「表向きは只の便利屋だけだな。本業はデビルハンター、この国に来たのも依頼があつたからだ」

『でびるはんたー？』

ネロ以外は聞きなれない単語に首を捻る。

「まあ、その説明はあそこでやってる手合わせの決着が着いてからでいいか？まあ、時間はかかんねえだろうけどな」

ネロにつられて視線を向けとそこでは

「…「なっ！？」「」」

ガキャン！ガキン！ガガガガガガガ！！！

最初に聞こえたのは騒がしい金属音。

次に目に飛び込んできたのは武の達人と言える程の腕を持つ趙雲、張飛、樂進、李典、于禁をたった一人で圧倒するダンテの姿があった。

「Sweet!! Babys!!」

「ハッ…ハッ…舐めるなあ！はいはいはいはいはい！
！」

「うりやりやりやりやりや！！！」

「一回！も！掠り！も！しない！の！！！」

「ッ！どないなっとなねん！」

趙雲と張飛の二人がかりの連続突きをリベリオンの連続突きで叩き落とし、同時に于禁の二刀による斬撃を全て弾く。
李典の背後から不意を狙ったドリルのような槍による突進するような突きも、闘牛士のようにマントを翻し回避する。

「この一撃で決める！ハアアア！！！」

距離を取り、気を溜めていた樂進は自身の持てる限りの気を拳に込めた一撃必殺の気弾を放つ。

ダンテは、その気弾を渾身の右ストレートで相殺した。
舞い上がる土埃、その土埃の中から出てきたダンテは無傷、相変わらず余裕の笑みを浮かべたままだった。

目の前の出来事が信じられないのか呆然として言葉が出ない少女たち

沈黙

ダァン！

その沈黙を破ったのは若き狩人の放つ一発の銃声。

「お楽しみのもとこ悪いが招待状も持っていない連中がパーティーに参加したいってよ」

「女と遊んでるんだ、早急に帰ってもらわないと朝になっちまうな」

突如、辺りに浮かび上がる幾つもの赤い魔方陣。

そこから聞こえる強烈な呪詛の言葉、向けられる殺意。

『スパ―ダァァー』

『スパ―ダァー』

『裏切者』

『スパァァ―ダ』

『ダンテエエエエ』

『逆賊』

『スパァ―ダァァァ』

『ネエエ口オオオオ』

赤い魔方陣から突如現れた数多の死神たちは、周囲を飲み込まんばかりの憎悪と殺意を撒き散らしながらダンテとネロに襲いかかった。

悪魔狩人（後書き）

次は、どうにか魔具を使いたい…。
ちなみに作者お気に入り魔具はケルベロスです。

狩り〜前編〜（前書き）

戦闘描写が難しいので、前編・後編に分けて投稿する予定です。
誰か、文才をください…。

狩り〜前編〜

「あ…の化物はなんなんですか…？スパイダ…御二人の真名？」

「悪魔だ、町の人間を皆殺しに来たのさ。細かい説明はこいつらを始末してからだ」

真っ青な顔の戯志才の質問に何の気なしに答えるネロ。

「悪魔なんているはず…風は悪い夢を…」

「王子様のキスで起こそうか眠り姫？」
愉快そうに笑うダンテ。

紅い魔方陣から続々と現れる異形の化物の群れ、その数はどんどん増えていく。

不気味に光る血のように紅い瞳は強烈な殺意を灯し、地の底から響くような声は悪意を放つ。

しかし、二人は軽口を叩き余裕の表情を崩さない。

「初めて来た国だったのに見知った顔ばかりだな！Hey！同窓会でもやろうってのかい！」ふざけた態度をそのままに、ダンテはエボニー&アイボリーをクルクルと回す。

「Ha！思ったより少ないな」

背中の上のレッドクイーンを地面に突き刺しハンドルを捻る。

「わ…たし…も戦います…！私は頭も良くないし、強いわけじ

やない…でも、なにもできずに見ているのは嫌だから！」

桃香は剣を構えた、へっぴり腰でガクガクと震える膝を抑えて、それと正反対の強い意思を持った瞳、その瞳が少女たちの心を縛っていた恐怖という鎖を断ち切った。

「桃香様を守るのが私の使命、必ず守り抜いてみせましょう」

「鈴々も闘うのだ！」

「武人として手合わせに乱入など例え化生であろうと許せません」

「フツ、さっきあれだけ動いたんだ、疲れてんだろ？」

優しく笑いながら心配するネロだったが、その心配は杞憂だったようだ

「私たちはずっと三人で旅してきたの、凧ちゃんが戦うって言ったら私たちも戦うの」

「せやな、こちらはまだまだ元気一杯やで！」

「なかなかガッツがある…でも、お嬢ちゃん達は観客だ。俺達が主役のパーティーだからな、ネヴァン！」

ダンテの右手が光り、何処から現れたのか紫電を纏った大鎌が握られている。

「ダンテ殿、その鎌はいつたい…なっ!？」

大鎌は紅い髪、死体のように青白い肌、紅い瞳、豊満な肉体を持つ冷たい印象を与える半裸の妖艶な美女に姿を変える。

『この姿にしたってことは…やっとな私の体が恋しくなったのね？そ

れとも、こんなにたくさん処女を集めて私への御褒美?』

「……ツツツ!!!／／／「……」」

自身の秘密を暴露された少女たちの顔が朱に染まる。

「そこにいるのはダンテのツレだ…食うなよ。よりによってなんでネヴァンなんだ…頭痛がしてきた」

ネロは眉間を押さえる。

「せっかくパーティーだから、そこにいるお嬢さん達にも楽しんで貰おうと思ってね」

『いいわよ。その代わり後で私を抱いて哭かせてちょうだい』
ネヴァンはダンテに絡み付く。

「お嬢さん達にあのクズを近づけるな、ちゃんと出来たら御褒美だ」
そう言っただんてはニヤリと笑うとネヴァンは腰をくねらせ少女たちのもとへ歩き出す。

ネヴァンはダンテがいつも事務所で聞き、時に自分を掻き鳴らし演奏した曲を歌い始める。

すると、少女たちを護るように数百匹の紫の雷を纏う黒い蝙蝠が飛び回る。

「いい曲だ、気分が乗ってきた」

ネロもニヤリと笑い、ギブスを外し青い光を放つ右手を解放した。

「H a - h a - h a ! I t i s t h e o p e n i n g
o f t h e c r a z y p a r t y ! ! 」

ダンテは叫び紅い閃光になって悪魔達に襲い掛かった。

狩り〜前編〜（後書き）

っというわけでネヴァン姉さんに出てもらいました。
文でエロさを表現するのって難しいです…。

狩り〜後編〜（前書き）

先頭描写が恐ろしいほど難しいです…。

ちなみにネロがかなり強くなってるという設定なのでゲームにない技が使えるのはご容赦を…。

狩り
後編

「イイイイヤアアアアア——！！！！！」

ダンテは先手必勝とばかりに一気に距離を詰め、強力な突進技“ス
ティンガー”を放つ。

突きの起動にいた悪魔達を串刺しに、あるいは吹き飛ばす。

そこから演舞のようにリベリオンを一閃、二閃、三閃、四閃と閃かせ周囲の悪魔を切り刻み、さらに腕が残像で何本にも見えるような連続突きを放つ。

悪魔は周囲を固め一斉に襲い掛かるも、ダンテは紅い残像を残し高く飛び上がり空中で逆立ちのような格好になり高速回転しながらエボニー＆アイボリーを乱射する。

“レインストーム”鉛玉の暴風雨を悪魔達は防ぐ手だてではなく撃ち抜かれた悪魔は成す術なく次々と砂に変わる。

着地の際に近くにいた悪魔に飛び乗り、そのまま地面を蹴り乗り回しエボニー＆アイボリーを乱射した。

周囲を取り囲んだ100体近くの悪魔達はあつという間に消え去った。

この圧倒的な次元の違う強さに知能を持たないはずの低級悪魔でも怯む、が

「Hey! What's up!」

人間ならばこれほど圧倒的な力の差を見せつけられれば恐怖を感じ逃げ出すものも多く現れる。

だが一部の上級悪魔を覗き原則として悪魔はただただ、殺すための存在。

恐怖というような感情を持ち合わせていない、その代わりにあるの

『スパアアード』

『スパードアアア』

『スパアードアア』

「Ha-ha！フォルトウナには最近ほとんど出てこないから運動不足だね！ウォーミングアップは終わりだ！練習相手になってもらうぜ！」

と言うとレッドクイーンを背中に収め、淡い光を放つ半透明の蒼い幻影刀を魔力で何本か作り出し悪魔に向かって放つ。

クルクルと回転しながら飛来する幻影刀を受けた悪魔はズタズタに切り裂かれ砂に代わる、幻影刀も何体かの悪魔を切り裂くと砕けて霧散した。

「まずまずだな」

ネロは小さく笑った。

「凄い…」

「初めてです、あの二人を止める策が何一つ思い付きません…」

「あんな滅茶苦茶な戦い方をする人達に策は通用しないのですよ…」

桃香は二人の戦いを見て予言の魔剣士の血を引くものだと確信した。戯志才と程立の策士は呆然とする。

だが、本当に驚いているのは武人である少女達。

自分より遙か高みにある二人の武を食い入るように、指の動き一つも見逃さぬように見ていた、いや、見惚れていた。

「程立殿、あれは滅茶苦茶な戦い方などではありません…変則的に見える体捌き、あれは全て基本に忠実です」

「確かに膂力や才能も規格外ですが、それ以上にどれほどの鍛練を、修羅場を越えたのでしょうか…」

「ダンテもネロお兄ちゃんも凄いのだ、鈴々はあんな綺麗な太刀筋見たことないのだ！」

「剣だけじゃないの、バンバン射ってるのが全部、化物の眉間に命中してるの」

「人間技ではない…あれほど膨大な気を暴走させずに完全に制御するなど…」

「ウチらとの手合わせはホンマに只の遊びだったんやな、今みたくに本気出されとったらと思うとゾッとするわ」

『うふふ、本気？ダンテもネロの坊やもあいつらと遊んでるだけよ。あんな面倒なことしないで、この辺一帯を消し飛ばせばいいのに』

「消し飛ばす…ネヴァン殿で宜しいですか？『いいわよ、お嬢ちゃん』ヒッ！か、消し飛ばすことなど可能なのですか？」

戯志才は勇気を持って半裸の女性ネヴァンに訪ねる。

『うふふ、戦ったことないから坊やのことはよく知らないけど、ダンテは簡単に出来るわ、こんなふう』

ネヴァンが妖艶な笑みを浮かべ、パチン！と指を鳴らす。

すると少女達に襲い掛かるうとするも蝙蝠の結界に阻まれ身動きの取れなかった悪魔達に紫色の特大の雷が落ちた。

落雷を受けた地面は焼け焦げ、深く抉れ、そこにいたはずの悪魔達を跡形もなく消し飛ばした。

『身構えなくても平気よ、ダンテの命令だもの襲ったりしないわ』
嫌われたら使ってもらえなくなったら悲しいもの』

「なぜ…ネヴァン殿はダンテ殿に従うのですか？失礼ですが、失礼ですが風にはネヴァン殿が命令に従うように見えないのですよ……」
程立が恐る恐る訪ねる。

『ダンテがネロの坊やくらいの歳の頃に殺し合っただね、擦じ伏せられちゃった。強い者に弱い者が従う、これは悪魔も人間も同じかしら？それにダンテみたいな色男に使ってもらえるのって最高よ』
ネヴァンはウツトリと恍惚の表情を浮かべ、そして腰をくねらせ歩き出す。

『またね、お嬢ちゃん。坊やが交代に来たみたいだから、私はダンテと遊びたいから行くわ』

そう言い残しウインクしてネヴァンは消えた。

鞘に入った閻魔刀を構え、紺色のコートを靡かせて全速力でネロは走る。少女たちの後ろに鎌を振りかざし襲い掛かる数体の悪魔が見えたから。

悪魔の存在に気付かない少女たちは武器を構えようとする。

「動くな！！フツ！！」

ネロは速度を上げて少女たちの横を走り抜け。

シャキン

超高速の居合いの連撃を繰り出した。

一瞬の静寂、悪魔たちも少女たちも何が起きたかわからず動けない。

ゆつくりと閻魔刀を納刀する。

カチン

「Die！」

悪魔はバラバラになって崩れ落ちた。

「もっと力を抜かなきゃだめだな…怪我はないか？」

ネロは不機嫌な顔をしながら閻魔刀をゆつくりと右腕の中に収めながら訪ねる。

少女たちは何故か顔を赤く染めコクンと頷いた後、一斉に質問しようとする。

「まあ、質問したいこともあるだろうけどちょっと待て！ダンテが来てからだ、ネヴァンが張り切ってたからすぐ終わるだろうしな」
ダンテの方に視線をむけると凄まじい爆音と叫び声が聞こえ始めた。

この後、ダンテとネロが少女たちに質問攻めにされたのは言うまでもない。

狩り〜後編〜（後書き）

久しぶりにDMC3をやってネヴァン姉さん縛りでバージル鬼いさに挑んだら、瞬殺されました（苦笑）
一番好きな武器なんですけどね〜

月光（前書き）

最近、仕事が忙しかったので更新遅れました。

月光

悪魔を狩った後、ダンテとネロは少女たちに説明を求められた。

宿で一杯飲みながら話そうという趙雲の提案に、楽進たちはネロに食事の礼を、ダンテに手合わせの礼をするという形で同意した。

「チツ、女に奢られるってなんだかな…」

「もっと喜べよ坊や、美女と一緒に飲もうって誘ってくれてるんだぜ」

「あんまり酒は好きじゃねえ…。つうか俺の歳で酒好きだったらやバイだろ」

「Ha！味覚も坊やなのか！俺は16くらいからテキーラ飲みまくってた！」

「安心したぜ、俺はあんたみたいな頭のイカれた大人にならないですみそうだ」

ネロは渋々、ダンテは上機嫌で着いていく。

劉備たちは、お財布 must die の状態なので（主に関羽が）断ろうとしたのだが結局推しきられて同行することになった。

とりあえずダンテとネロは少女たちに悪魔、便利屋の裏の顔デビルハンター、自分達がこの地に来た経緯について簡単に説明した。

話を聞き終わると少女たちは疑惑を浮かべてジーっと二人の顔を見る。

ダンテは笑いながら返す。

「Ha-ha! そんなこと突然言い出す奴がいたら薬漬けで頭のイカれた野郎だつて思うだろうぜ。」

ま、それがマジだから笑えるだろ! しかし、あれだけセブンヘルズがいるなんて、どうやら乱世つてのはマジみたいだな」ダンテは少女たちの反応を見て満足そうに笑ってから酒を飲み始めた。

「らしいな。大方、楽進たちに絡んでた連中みたいなバカに誘われてでてきたんだろ」

ネロは眉間に皺を寄せる。

「あ、あ、あああ、あくあくああ悪魔…」

「顔真つ青だぞ、こつという話は苦手か? キツイなら休め」
ネロは少し心配そうな顔をする。

「ご、御心配には及びません!」

「そうなのだ、愛紗お姉ちゃんとは幽霊とかお化けとかすつごく苦手な怖がりなのだ」

「愛紗ちゃんは怖い話は話すのも聞くのも苦手で、あはは…」

「いきなり人に斬りかけたり串刺しにしたりするおっかない女だ

と思つてが、見かけ通りの可愛い仔猫ちゃんだつたか」

「り、鈴々！桃香様まで…。私はチョット苦手なだけです…ダンテ殿、冗談は止めてください…私のような武骨者がか、か可愛いなどと…／＼／」

「謙遜すんに武骨者つていうのがこの国の流行なのか？まあ、いい…他に質問はあるか？」

ネロは真面目な顔に戻つて聞く。

「せぶんへるず？へるらすと？よくわからないのー？」

「ヘルⅡプライド 傲慢

ヘルⅡエンヴィー 嫉妬

ヘルⅡレイス 憤怒

ヘルⅡスロース 怠惰

ヘルⅡグリード 強欲

ヘルⅡグラトニー 暴食

ヘルⅡラスト 色欲

こいつらを纏めてセブンヘルズ。

七つの大罪を犯して死んだ罪人を地獄で攻め続けるのが仕事の下級悪魔だ」

ネロは簡単な説明をする。

「あんな狂暴なのが下級なんか？普通の兵の何倍も強いで…中級や上級は…あかん、考えとくないわ…」

「あれで下級とは…悪魔を侮っていました」

「それだけの実力があれば中級悪魔くらいには通用する。それに雷

を使う悪魔の中でも最上位の超上級悪魔はもう見たる？」

「ネロ殿、えーっと…それは楽器で鎌に変形し、電を操り蝙蝠を呼び出す不思議な術を使う女性ですか？」

趙雲は笑っているが言ったが表情が引き吊っている。

「その通り。ネヴァンは男の精気を根こそぎ吸い取って殺す悪魔だ。つうか殿は止めてくれ、俺まだ18歳だぞ、呼び捨てでいい」

「……えっ、18!?」「……」

戯志才は目が飛び出さんばかりに驚いた、てゆうか回りにいる少女たちと見事にハモった。

「俺が18って、そんなに意外か? つうか、ネヴァンを人だと思ってたのにビックリだ」

「そんなことは、ネロ…さんは背が高く大人びていてカッコい…ゴホン、一般的に悪魔と呼ばれるものは怪獣や化物のような姿をしているとばかり…」

「Ha-ha-ha! ネヴァンが聞いたら悦ぶな」

「あー、ネヴァンは見かけ人だしな。怪獣や化物ね…ケルベロスみたいなやつか」

「なるほどお喋りワンちゃんは確かに悪魔のイメージ通りだな」
と言ってダンテは三節のヌンチャクを呼び出す。

「鈴々は犬が大好きなのだ!」

「ワンちゃんとお話するの夢だったんです!」

桃香と鈴々はキラキラと瞳を輝かせ身を乗り出す。

「残念。こいつはデカすぎて宿に入らない」

ダンテは両手を広げておどけてみせる。

「ええええええ！！！」

「夢をブツ壊すみたいで悪いがケルベロスは可愛い犬と真逆の存在だぞ」

「ネロ殿、嫌な予感しかしないのですが、ケルベロスとはど、どどのような？」

愛紗は顔面蒼白でアグナス並みに吃りながら質問する。

「人間を一飲みにしちまうくらいデカイ三つ首の狼の姿をしてる氷を操る超上級悪魔だ。性格は短気で狂暴、ワンちゃんなんて言ったらブチキレて八つ裂きか氷漬けだな」

「あいつ狼だったのか？」

「知らなかったのか？」

「あー、だから初対面の時キレてたのか」

「呆れた、あんたの魔具だろ？悪魔が不憫に思えたのなんて初めてだ」

「あの…、なんでネヴァンさんやお喋りワンちゃんは狂暴な悪魔なのにダンテさんの言うことはちゃんと聞くんですか？」

「H a - h a - h a ! 喧嘩に勝ったら懷かれて武器として使ってく

れって頼まれた。使ってやる代わりに、俺の命令は絶対だ」

「交換条件なのですね？でも、悪魔のですよ。もし人を襲ったら、どうするのですか？」

「俺が命じなきゃ本来の姿には戻れないが、もしその時は仕事をするだけだ」程立の質問にダンテはニヤリと笑って答えた。

「はあ、桃香。可哀想だなんて思うなよ、コイツらはダンテに惚れ込んで従ってる、お前と一緒に旅してる愛紗や鈴々と同じだ。もっとも理由は自分より圧倒的に強いに限定されちまうけどな」

ネロは悲しそうな顔をしている桃香にやれやれという顔で説明する。

「H a - h a - h a ! 手懐けるのも結構大変なんだぜ、串刺しにされて雷落とされたり、全身火だるまになったりな」

「そんなことをされたら普通は死んでしまつのですよ…」

「俺の体はちよつと特別でな悪魔の親父と人間の母さんとの間に生まれた子なんだ、そのくらいじゃ死なない」

「悪魔たちが御二人にスパードと叫び襲いかかっていました。その…今、名乗っている名は偽名ですか？」

「名推理だが、俺の名前は正真正銘ダンテだ。まあ、若い頃は偽名を使つてた時期もあるけどな。あいつらの言ってるスパードってのは親父の名前だ。親父は悪魔の中でも特別有名な悪魔でね、よく間違えられる」

「ネロは偽名じゃなく正真正銘、俺の名前だ。なんでも、孤児院の

前に捨てられてた赤ん坊の俺は真つ黒な布に包まれてたらしい。だからイタリア語で黒、ネロって名付けたんだとさ。それでも、結構気に入ってる」

「私は訳あつて戯志才という偽名を名乗っています但本名は郭嘉といます…御二人を疑うような真似をしてしまい申し訳ありません」

「気にするな、時が来たら堂々と名乗れば良い。少なくとも俺はそうだった」

「スパイダ…スパイダ…まさか！魔剣士スパイダ！？」

「星殿には心当たりが？」

「知ってるもなにも武を志す者なら一度は憧れる。世界が闇に覆われ100万の闇の軍勢が侵攻してきた、その軍勢に一人立ち向かい、それをことごとく撃ち破り、ついには退け世界を救った伝説の英雄…その者の名は魔剣士スパイダ」

「ここでの英雄扱いといいフォルトウナの神様扱いといい、まったくもってバカらしい」

「ふおるとうな…なの？」

「俺の故郷だ、大昔にスパイダが領主やってたみたいでな。神様なんて崇めてるシケた国だ」

「Ha-ha!まったく坊やの言う通りだ、親父が聞いたらきつと口一杯苦虫頬張って噛み潰したみたいな酷い顔するぜ」

「悪魔はなぜダンテさんやネロさんを襲うのですか？目の前にいる風たちを無視してまで襲いかかったのか、不思議でしょうがないのですよ」

「親父スパードは魔帝ムンドウスじゃ通じねえな…あー、悪魔の王様で神様みたいな奴の右腕で絶大な信頼を得て人間界侵攻を任されていた最強の悪魔だ。それが突如正義の心に目覚め魔界を裏切り、人間に味方した。親父は人間界侵攻の命を受けた仲間をことごとく撃ち破り、最後はムンドウスをブツ倒して封印して悪魔が人間界に入れなくした。悪魔たちの人間界を滅ぼすって計画は御破算。悪魔にすりゃ親父は計画を台無しにして神様の力まで奪っちゃった最悪な裏切り者だ。目の前に殺せる人間がいても、殺しても殺し足りないほど憎くて憎くて仕方ないスパードの気配が近くにあったら奴等の目的はスパードの殺害に代わるのさ、もつとも親父は俺にリベリオン、死んだ双子の兄貴に閻魔刀、もつとも閻魔刀は俺が坊やに渡したから今は坊やの物が、を残して消息不明になっちゃったけどな」

「ダンテさんのお父さんも…ダンテさんも裏切り者扱いされて…危ない目にいっぱいあって…なんで……」

桃香は今にも泣き出しそうな顔をしている、他の少女たちも同様に

「ツライこともキツイことも山ほどあった、でも自分で選んだ生き方だ、後悔はしてない。親父は俺ほどじゃないがそこそこ色男だったし、嬢ちゃんたちみたいな美女の為に戦ったのかもな。そこにいる坊やは、惚れた女を守るために神様ブン殴ったとんでもない悪ガキだ」

一瞬だけ見せた真面目な表情は消え、ダンテはいつものように笑う。

「……神様!!??」……少女たちが一斉に振り向く。

「俺が殴ったのは自称“神”のボケたジジイだ。ムンドウス倒して封印し直しまったアンタはなにもんだ?」

「強くて格好よくて美人の味方の優しい便利屋さんだ」

「俺にはムカつくオッサンにしか見えないけどな」
ネロは席を立つ。

「Hey!こんなに美女を残してどこ行く気だ坊や?」

「散歩だ。お楽しみの邪魔しちゃ悪いからな……」
と言ってネロはコートから何かを取り出しダンテに投げる。

「ヒュッ」坊やも気付いてたか?流石、騎士団長殿「Fuck!」
ムキになるなよ、坊やの黒歴史だったか?まっ、有り難く使わせてもらう」

「一つしか持ってきてないからそれで最後だ、代わりはない」ネロはダンテに中指を立て、部屋を出ていった。

「さてと、坊やも気をきかせて行ったことだし…楽進、足を見せてみな」

「ほう、ダンテ殿は随分と積極的なのですね」
ニヤニヤする趙雲。

「Ha!回りくどいのは嫌いなんですね」

「ダンテ殿の逞しい肉体が楽進殿を押し倒し、最初は抵抗するも快

楽には勝てず…ブハッ」

「稟ちゃん詰め物をしてトントンしましうね、トントン」

戯志才改め郭嘉は鼻血を吹き出し、程立は慣れているのか処置をしている。

「ただだだダンテ殿！わわっわ、私は鍛えているので、その…太いので殿方に見せられるような「そんなことない。引き締まって最高だ、グツときた」あうあうあう…／＼／」

ダンテは楽進の手を掴み優しく寝具に寝かせる。

「さてと、ウチ等は邪魔者みたいやから退散するわ。終わったら教えてな」

「凧ちゃん頑張れなの」

「まだ心の準備というものが…沙和、真桜！見てないでダンテ殿を止めてくれ！」

「は、はは破廉恥です！こういうことは色々順序が…とっ、ととにかくいけません！」

「なんで足見せるだけなのに皆、騒いでるのだ？」

「鈴々ちゃんはまだ知らなくていいと思う」

「Ha-ha-ha！俺はその気だったんだが桃香に怒られちゃったから御預けみたいだな。その右足は俺にかました最後の大技の時

に痛めたのか？黙って見せてみな」

「はい、ダンテ殿の仰る通りです… 未完成の技を強引に放ち着地に失敗しました。何時気づかれたのですか？悟らせないよう気を付けていたのですが…」

楽進の足はパンパンに赤く腫れていた。

「痛かっただろ？大したガッツだ。どんなに上手く隠しても自然に引き摺るからな、気付いたのはついさっきだ」

「あかん、なんで言わへんねん！腫れとるやん！」

「宿の人に冷やせるもの借りてくるのー！」

「焦るなよ。ケルベロスで氷作って冷そうかと思っただが手間が省けた、坊やからのプレゼントだ」

ダンテはネロが投げ渡した緑色の星形の宝石に少しだけ力を込め碎き楽進に振りかける。

すると楽進の体を淡い光が包み、先程までが嘘のように足の腫れが一瞬で引いて完治した。

「痛みが消えた…！？それはネロさんが投げた… そうですか、まだまだ未熟と痛感しました」

「美女は男の目線を釘付けにしちまうからな、俺も坊も楽進が良い女じゃなきゃ気付かなかった」

「ッ！あまりからかわないで下さい！／／／」

「怒った顔も、中々にcuteだ。悪いな俺に撃ち抜かれた心を治

すものは生憎と持つてない」

「~~~~ツツ／／／」

「ところで、さっきの宝石なんやったん？」

「バイタルスターって言つてな、怪我や病気を一瞬で治す悪魔の血を加工して作った秘薬みたいなもんだ」

「悪魔の血？それって危ないんか？」

「一個二個なら問題ないが気の弱い人間なら数十個、嬢ちゃんたちなら数百個でたぶん悪魔に取り憑かれて精神を病んで廃人だ。もつとも俺と坊や、（人間だと例外はレディだな）はいくら浴びても平気だけだな」

「いって一つレッドオーブを取り出した。」

「ブツ細工なのー！って、凧ちゃんに危ない物使わないでほしいの！」

「無害だ。獅子の面した喋るデカイ像にレッドオーブを捧げて望みの物を言つと無害加工されて出てくる、機会があつたら見せてやる原理は知らないけどな」

「話し掛けられると呪われると言われている呪いの像にそんな使い方があつたとは…」

「愛紗ちゃん、私の生まれた村だと土地の神様ってお供え物してたよ」

「鈴々は悪いことするとバチがあたるって言われたのだ」

「ここにもあるか。あれは時空神像って言って誰がなんの為に作ったか知らないが世界の記録を取り続けてるらしい。さてと、運動して酒も飲んだ、美女とベッドインは出来なかったが楽しめた。寝るとするか」

そう言うときダンテは長椅子にゴロンと横になった。

「あのー、ネロさんはどこ行っちゃったんでしょう？」

「ふあー！たぶん朝方には帰ってくる。坊やは基本的に人前じゃ寝ない…坊やの寝顔を知ってるのは多分キリエちゃんだけさ…警戒心の強い黒猫みたいな奴だから大方、屋根の上あたりで…zzzz」
言い終わる前にダンテは寝た。

ネロは宿の屋根の上でレッドクイーンを抱くようにして座り静かに瞳を閉じていた。

外には綺麗な満月、ネロの銀髪が光を反射して淡く輝く。

その姿は美しい若い狼のように見えた。

「…桃花か？」

「は、はい…お休みなさいって言いに来たんですけど。あの、その…起こしちゃいましたか？」

その姿に見とれていた桃花がハッと我にかえる。

「俺のことはいいから部屋に戻って寝ろ、風邪ひかれたら気分悪い」

「じゃあ、ネロさんも部屋に「断る、団体行動は苦手なんだよ」あ

う…」

「悪魔の気配はしないけど外は俺が見張っとく、一応な。月が見れて悪い気もしないしな」

「ネロさん！ご馳走してくれて、守ってくれて、見張りまでしてくれて…本当に今日はありがとうございました」

「勝手にそうなったか俺が勝手にやってるだけだ、頭下げられても困る」

「ちゃんと言っておきたかったから、お休みなさい」

桃花は笑顔で頭を下げ行っただかに見えた。

ネロは少し寝ようと思って目を閉じたが、すぐに桃香が戻ってきたので目を開ける。

「今度はなんだよ？」

「あの、高くて降りれなくなっちゃいました…」

「ハア、捕まってる…」

「キャ！？／＼／」

ネロは桃香をお姫様抱っこして屋根から飛び降り、そのまま地面に音もなく着地した。

「おやすみ…」

桃香を優しく降ろしてネロはトンと地を蹴り、再び屋根に上っていた。

くくおまけくく

「うむ、このケルベロスというヌンチャクは便利だな。近くに置いておくだけで酒が冷える」

「ダンテ殿の許可なく使ってはまずいのですよ」

「使ってはおらぬぞ、しかもさつき大発見をした。ワンちゃん！と言つと、このように氷まで手に入る」

「星殿、それは怒っているのでは？狂暴な悪魔らしいですぞ」

「あつ…」

『おのれ人間の小娘、貴様の顔決して忘れぬ…』

騒がしい朝（前書き）

ネロってクールそうに見えて結構熱血ですよ。

騒がしい朝

ネロは夢を見ていた。

周りは真つ暗な闇、そこにいるのはネロとキリエだけ。

「ネロ！！」

「キリエ！！キリエーーーー！！！！」

キリエは離れていくネロが手を伸ばしても届かぬ所へと、しかし、それでもネロは手を伸ばす、届けと願って…。

「…キリエ！」

ネロは目覚め、意識を覚醒させる。

「この夢を見るのも久しぶりだな…」

一言呟き、右手から閻魔刀を取りだし屋根から飛び降りると、宿から数分の場所にある大きな木の下に来た。

始めるのは一年前、閻魔を手にしたときから日々の日課となっている鍛練。

目を閉じ精神を落ち着かせ、全身から余計な力を抜き、居合いの構えを作り、静かに時が訪れるのみ待つ。

一陣の風が吹き、木から数枚の葉が舞い落ちた。

チン

いつの間に抜刀したのかネ口の右手には抜き身の閻魔刀、その抜き身の閻魔刀をゆっくりと納刀し完全に鞘に納める。

カチン

すると舞い落ちた木の葉は全て真つ二つになり地に落ちた。

「Too late（遅すぎる…）」

神速の居合い。

しかしネ口の表情は冴えず、不機嫌そうに眉間に深い皺を寄せた。

「やあやあ、早起きですなあ。手合わせをしたいと思っていたら偶然、ネ口殿を見つけましてな。早起きは三文の得と言うのは本当のようですな」

ネ口が後ろに視線を向けると槍を構え、挑発的な笑みを浮かべた趙雲が立っていた。

「偶然？人のこと付け回しといてよく言うぜ…わかった、遊んでやるから俺が勝ったら付け回すは止める。これじゃ、うかうか寝てられやしねえ。ハア…」

ネ口は閻魔刀を右手に納め、ギブスで右手を隠し、なにも武器を手にしていない素手の状態で心底面倒くさそうに言った。

「ネ口殿は強い…しかし、女子だと遠慮しているなら侮辱です…私とて一人の武人！戦いで命を落とす覚悟は出来ております！」

趙雲は武器を構えないネ口に怒りを露にする。

「Ha！そつちこそ余計な気遣いなんていらねえよ。Hey！C」

mon！」

ネロは不敵な笑みを浮かべ、左手を前に付きだし来いと挑発する。

「ツツ！舐めるなあ！！」その挑発に趙雲の我慢は限界を超えた、繰り出したのは心臓を狙った自身の持てる技の中で最速の突き。

ネロは趙雲の渾身の一撃を体を半身にズラしてあっさりと交わし、そのまま流れるように踏み込んで距離を潰し、いつの間にか左手に持ったブルーローズを趙雲の額に突き付け引き金に指を掛けた。

「悔いはありません…」

趙雲は静かに目を閉じ、ネロは引き金を引く。

カチャン

が、銃弾は放たれなかった。

「…えっ！？」

趙雲はビックリしているが、それもそのはず、ネロは最初からブルーローズの弾を抜いていた。

「Bang！Checkmate」

ネロはブルーローズをホルスターに納め踵を返し立ち去ろうとする。

「待ってください…！！」

趙雲の絞り出すような声、その声がネロの歩みを止める。

「なんだよ、まだなんかあんのか？」

「私は槍の扱い、特に突きには自信がありました…。しかし、昨日はダンテ殿に、今日はネロ殿に簡単に避けられました…。正直に言うてくだされ、私の突きは…遅いのでしょうか？」

趙雲は悔し涙を瞳いっぱいに溜めて、その場に座り込んでいた。

男は女の涙に弱い、ネロも決して例外ではない。

「ハア…。突きはかなり速かった、でも避けるのは簡単だ。教えるのは得意じゃねえけど、それでもいいなら教えてやる」

「ほら、立てるか？」

ネロはそつと左手を差し出す。

「誠に申し訳ありません…／＼速いのに避けるのが簡単とはどういうことなのでしょう？」

趙雲は少しだけ顔を赤らめてネロの手をとって立ち上がると、涙を拭いて真剣な顔を作った。

「お前はキレてて一撃で俺を突き殺そうってのがバレバレだった。どんなに速かろうが威力があるうが、最初から来る場所わかってるなら簡単に避けれる」

「こちらから挑発したのに逆に挑発に乗って冷静さを欠いてしまうとは…私は本当にまだまだ未熟者ですなあ」

「もし、冷静にフェイント混ぜて攻め込てきてたら、かなり面倒だった」

「ふえいんと？」

「右と思わせて左、上と思わせて下、殴ると思わせて蹴り、方法はなんでもいい、とにかく相手にどこを狙ってるか悟らせないってことだ」

「なるほど……」

「あとは動きが固いな。肩の力を抜いてもっと柔らかく全身を使え。そうすりゃ、もっと速く鋭く動く、体も槍もな」

「力を抜く…柔らかく全身を……」

「まあ、言ってもわかんねえよな。ちょっと、その槍貸してくれ」

「……………」

趙雲は黙って槍を手渡す。

「良い槍だ。お前の突きは腕だけしか使ってないんだ、見てわかるか？」

ネ口は槍を軽く素振りして見せる。

「わかります」

趙雲はネ口を食い入るように見つめる。

「これは小さく、鋭く、速く、貫く武器だ。意識しろ。力を抜いて柔らかく、余計な力はいらない、力んだ分だけ遅くなる、使うのは腕じゃなくて全身だ！フツッ！」

ビュン！！！

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

ネロの腕から閃光のような突きが伸びる、その突きが風を切り裂き鋭い音を鳴らした。

「やってみな」

ネロは趙雲に槍を返す。

「フー、頭から足の指の先まで全身を使って…力を抜いて柔らかく…速く、鋭く…ハッ！」

ビュン！

趙雲の突きは先程と比べ物にならないほど速く、鋭く、伸びた。

「おお！！速い！速いですぞ！しかし、難しいですなあ…」

「だろ？俺もまだ完全に来るわけじゃないから教えられんのはこままでだ」

「ネロ殿！意地悪なさらずにもっと教えてくだされ！」

趙雲は殆どの男はイチコロであろう上目遣いでネロを見つめる。

「グッ、そんな目で見たって無駄だ…もう、教えられる事はない。ダンテに聞け連続突きは得意だし、ム力つくけど俺よりずっと強い。一年前に戦った時は完全に遊ばれた」

「なんと、ネロ殿がですか…？」

「ダンテは自他共に認める世界最強のデビルハンターだ、強さの次元が違う」

「ネロ殿でも充分強さの次元が違うと言うのに、そのネロ殿が強さの次元が違うと言うダンテ殿は…5人がかりでも勝てない訳ですな……」

「普段は多額の借金あるくせに週休六日で気分が乗らないと仕事をしないダメダメなオッサンなだけだな。大剣、拳銃、シヨットガン、バズーカ、二刀、ヌンチャク、大鎌、籠手具足、厄災兵器、無尽剣…とにかくなんでもかんでも腕は超一流だ」

ネロはもう話しは終わりだと言うようにスタスタと歩き始めた。

「ネロ殿…！待ってください…！置いていくなんて酷いではありませんか、泣いてしまいますぞ」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら趙雲は小走りで追いかけてきた。

「チツ、なんだよ趙雲？教えることなんてもう無いぞ」

「星です、星とお呼びください。宿に戻るのでしょうか？一緒に戻ろうではないですか、旅は道連れですぞ」

「それ真名つてやつだろ？俺なんかに教えていいのか？呼んだ瞬間ブツ刺すとか止めてくれよ」

「そんなことはしませぬぞ！」

「悪かった、念のためだ。昨日、ダンテがすっかり初対面で愛…関羽の真名呼んじまって串刺しにされたからな」

「なんと！関羽殿はダンテ殿に一撃入れたのですか！？」

「謝罪半分、悪戯半分って感じでわざと刺された。見た感じ實力は趙雲「星です！」星と互角だな、いい練習相手になると思うぞ」

「ほう、互角ですか？良いことを聞きました」
趙雲はニヤリと笑う。

「寝込み襲って心臓を一突きとか止めるよ」

「そんな卑怯な真似はしませぬぞ！ネロ殿は私のことをどのような女子だと思っているのですか！」

「人のこと槍もって追いかけて回す戦闘狂」

「ハッハッハ、手厳しいですな」

「笑って誤魔化そうとすんなよ…」

そんなことを話ながら二人は宿に戻った。

二人の朝帰り（誤解なのだが）が見つかってしまい、ネロが趙雲を真名で呼んでいること、趙雲の紛らわしい発言のせいで誤解が誤解を生み、ネロは女子たちの一方的な言葉攻めにあうことになった。

依頼と報酬

「いっぱい失礼なこと言っちゃってごめんなさい…」
涙目の桃香。

「ガキの頃から嫌われる事には馴れてる。部屋に戻るなり女性の敵扱いされて枕ブン投げられたのは初めてだけだな」
ネロは肩を竦め両手を広げ少し疲れた顔で言った。

「ネロお兄ちゃんが全部避けちゃったから枕投げにならなかったのだー！」
まったく事情がわかっていない鈴々はプクツと頬を膨らませた。

「何も言わずにフラッいなくなってしまったので、てつきり夜の町を遊び歩いて…ノノネロさんが、どこに行つてなにをするかを教えてくれていたらこんなことにはなりませんでした！」

愛紗は顔が赤くなつたのを誤魔化す為に強い口調で詰め寄る。

「俺が何処で何をしようが俺の勝手だ、他人に教える必要なんてない」

ネロは少しだけ目付きを鋭くして愛紗を睨む。

「ッ！確かにそうかもしれませんが「愛紗ちゃん！」桃香様？」
ネロの態度の悪さにカチンときた愛紗が更に詰め寄ろうとするも桃香に止められる。

「昨日、ネロさんは屋根の上で見張りしてくれてたんだよ…」

「桃香様、そういうことはもう少し早く…申し訳ありません」
愛紗は頭を下げる。

「そこで爆睡してる髭は少しでも悪魔の気配がしたら飛び起きる。
だから俺は見張りなんて必要ないし、やってない。謝られても困る。
昔から団体行動ってやつが大の苦手だね、一人が好きなんだ」
ネロは少々バツが悪そうに答える。

「そういうことにしておきます」
星はネロを見て楽しそうに笑う。

「なんだよ？」

「手合わせしたら相手がどんな人間か、少しだけわかりますぞ」

「趙雲殿、勝負の結果は？」

「いや、恥ずかしながら手も足も出ませんでした。その代わり、
手や足の出し方を少々、手直ししてもらったので大きな収穫になりましたぞ」

「ネロ殿！是非、私にも御教示願います！」

「鈴々と勝負なのだ！」

「断る」

「なっ、何故！？」

「俺が教えられる事なんてないし、タダ働きなんて御免だね」

「ネロお兄ちゃん、趙雲とは手合わせしたのにズルいのだ！」

「槍持った女に朝から追っかけ回されてホントいい迷惑だ…さっさと逃げればよかった」

「ふむ…関羽殿、朝食の後にでも一つ手合わせしませんかな？」

「趙雲殿が…望むところ！」

「じゃあ、ネロお兄ちゃんは鈴々と勝負するのだ！勝負なのだ！」

「ハア、わかったよ…気が向いたらな」

「ネロさん貴重な薬のおかげで足の怪我も癒えました、ありがとうございます」

楽進は頭を下げる。

「俺はダンテに渡した後のことは知らないし、礼を言われてもなんのこともかわかんねえよ」

「あはは、凧はこういう性格やねん。それにダンテさんにちゃんと礼をする練習も兼ねとるんや」

「凧ちゃんは照れて真っ赤になってちゃんと話せなくなっちゃうの」

于禁と李典は楽進をからかう。

「ああね、頑張れよ」

「ち、ちち違います！誤解です！ネ口さんも納得しないでください！沙和！真桜！！！！／／／」

「風い、また赤くなつとるで」

「風ちゃんは顔に出やすいの」

「~~~~ツツ／／／」

「寝不足か？オッサンのイビキがうるさかったなら濡れ布巾でもかけてやればよかったのに」

ネ口はやや呆れ顔で騒いでいる様子を眺めた後、グッタリしている郭嘉と椅子に座ったまま器用に眠る程立に視線を向けた。

「ぐうー……zzz」

「いえ、そうではなく…その、私達は恥ずかしながら軍師の端くれです。で悪魔に有効な策を考えているうちに朝に…風が寝ているのは何時ものことなので御心配には及びません」

「へえ、頭が良いと思ってたけど軍師だったのか？なるほどね」

「まだ実戦経験もない半人前です。結局、良い策も浮かびませんでした……」

「悪魔との戦い方なんて教科書にないし、聖書や呪い書に載ってるのは大概嘘っぱちだ。いいぜ、フォルトウナのでよければ教えてやる」

「是非、教えてほしいのですよ」

「風、いつから起きていた？」

「……………ぐうー」

「寝るな！！」

「その代わりに、この国の地理・風土・貨幣・戦争・噂なんかを教えてください」

「願ったり叶ったりなのですよ」

「口頭でいいか？こっちの文字はさっぱり読めなくてな」

「構いません、ではまず〜」

ネロと二人の軍師は一时间ぐらしかけて互いに持っている知識を交換した。

「ありがとう、参考になったよ。説明するのはどうにも苦手だし、悪いな」

「いえいえ、とてもわかりやすかったですよ」

「ネロさんは何処かで兵法を学んだことがありで？」

「10歳で騎士団に入ってから、ずっと悪魔相手に切った張ったで兵法どころか、まともに義務教育すら受けてない。なんか気になったか？」

「いえ、実に計算され無駄のない策なのでてつきり名のある軍師に師事したことがあるのかと…」

「フォルトゥナの騎士は悪魔から一般市民を守るのが仕事だ。優秀な奴から俺みたいなの落ちこぼれまで町の地図・市民の誘導・悪魔との戦闘、この三つは徹底的に教え込まれる。じゃないと仕事にならないからな」

「落ちこぼれどころか、とても優秀なですよ」

「そんなこと言われたのは始めてだ。お世話として受け取っとくよ、軍師殿」

ネロは小さく笑った。

「ネロ殿、余りお喋りに熱中しているとご飯が冷めてしまいますぞ。それとも、小さな女子が好みですか？」

「すぐ行く…って、俺にそんな性癖はない」

「ネロさん、いけません…しかし抵抗も虚しく獣のように襲い掛かり服をブハッ！」

「詰め物をしてトントンしましょうね、トントン」

「ふがふが」

「…まあいい、気にしたら負けだ。ダンテはまだ寝てるか？」

「張飛殿が先程から揺らしたり頬をつねったりしていますが全く反応ありません」

「ダンテ、朝なのだ！起きるのだー！」

鈴々はダンテに跨がって顔をペシペシ叩いている。

「鈴々、いくらなんでもそれは…」

「でも愛紗ちゃん、ダンテさんずっと寝てるよ」

「……………ZZZ」

ダンテに全く反応はない、起きる気配すらなく、そのままイビキをかいて眠り続けている。

返事がない…まるで屍のようだ。

「昔話であつたな、眠り続ける王子さまをお姫様を接吻して起こすつちゅうのが」

「凧ちゃん！ブチュ〜っといっちゃえなの！」

「は、破廉恥な！それに、その話は王子さまが眠り続けるお姫様を起こす話で…」ツツ／＼／＼」

眠り続けるダンテを弄って女子達は大いに盛り上がっていた。

「ずっとあんな感じですな」

「一応、アンタの意見も聞きたいから起きろダンテ。オッサン！髭！変態親父！チツ…」

ネ口は乱暴に揺さぶってみたが相変わらず眠り続け反応がないダンテに思いつきり舌打ちをした。

「貸せ」

ネロは熱々のお茶と桃饅を桃香から引つたくと

「熱いから火傷しないようにって…ネロさん…え」と、嫌な予感しか…」

ダンテの顎を掴み口を開け熱々の桃饅を押し込みお茶を流し込み、無理やり口を閉めた。

「……ちよ……!!」

女子達の声が見事にシンクロした。

「……!!」

ダンテの体が跳ねるように痙攣する。

「Catch this!」

ネロは痙攣するダンテの頭を右手で掴み、二階の窓から外に投げ捨てた。

「……二階……」

またもシンクロする少女達。

「部屋にはドアから入りなさいってママに教わらなかったのか？」

「酷いぜ坊や。俺の美女の熱いキスで朝を迎える作戦が台無しだ」
ダンテは何事もなかったかのように窓から入ってきた。

「そんなの待ってたら一生起きねえよ。せつかく優しく起こしてやったんだから感謝してほしいぜ。トリッシュの電撃や、レディの眉間に鉛玉のがよかったか？」

「坊やもくらってみるか？あれ結構痛いんだぜ」

「悪魔も尻尾巻いて逃げ出すくらいヤバイ女の前で眠り続けるなんて頭のイカれたジャンキーか、よっぽど鈍感な奴しかいねえよ」

「H A - H A - H A ! さっき食ったのは甘くてイケるな、悪くない」

「ええええええー！！！！」

またまた、シンク口する少女達。

「今日は朝からついてるな！良いことがあるそうだ」

「そいつはよかったな。俺は朝から運に見放されてるぜ、本当に最悪だ」

何事もなかったかのように話始めるネロとダンテ。

「愛紗ちゃん、常識ってなんだっけ？アツツ！うゝ、舌火傷しちゃった……」

「私にもわからなくなってきました…桃香様、お水を」

「そんなことより！今はご飯なのだ！ご飯を食べたらネロお兄ちゃんと勝負するのだ！」

「Damn it」

「星殿、ダンテ殿とネロさんではどちらが強いのでしょうか……？」

「ダンテ殿だ。間違ひなく一騎当千、いや……万に匹敵するであろう」

ネロ殿が強さの次元が違うと言っていた」

「星ちゃんに、そう言わせるほど強いのにちっとも感じさせない、不思議な人達なのですよ」

程立は視線を向ける。

「昨日は、無理矢理手合わせに付き合わせてしまったあげく怪我の治療までしていただき本当になんとお礼を言ったらいいか…」

「なんのことだ？ まっ、どうしてもってんなら部屋で二人っきりの時にな。期待していいんだろ？」

ダンテはウインクをする。

「う、御冗談を！ わわ私は武骨者ですし…その…／／／／」

「武骨？ こんなに良い女なのか？ 刺激があるから人生は楽しい、俺はそう思ってる。何事も経験だぜ、男も女もな」

「あうあうあうあう……きゅー／／／／」

ダンテの言葉についてに楽進は真っ赤になって倒れた。

「風ちゃん、深呼吸ヒーヒーなの！」

「真桜、それちゃう！ しっかし、ダンテさん風はこういうのに慣れてへんねん手加減したってや」

「ちょっと刺激が強すぎたか」

ダンテが起床して更に騒がしい１日が始まった。

依頼と報酬（前書き）

誤字があつたので一部訂正しました

依頼と報酬

「いっぱい失礼なこと言っちゃってごめんなさい…」
涙目の桃香。

「ガキの頃から嫌われる事には馴れてる。部屋に戻るなり女性の敵扱いされて枕ブン投げられたのは初めてだけだな」
ネロは肩を竦め両手を広げ少し疲れた顔で言った。

「ネロお兄ちゃんが全部避けちゃったから枕投げにならなかったのだー！」
まったく事情がわかっていない鈴々はプクツと頬を膨らませた。

「何も言わずにフラッいなくなってしまったので、てつきり夜の町を遊び歩いて…ノノネロさんが、どこに行つてなにをするかを教えてくださいたらこんなことにはなりませんでした！」

愛紗は顔が赤くなつたのを誤魔化す為に強い口調で詰め寄る。

「俺が何処で何をしようが俺の勝手だ、他人に教える必要なんてない」

ネロは少しだけ目付きを鋭くして愛紗を睨む。

「ッ！確かにそうかもしれませんが「愛紗ちゃん！」桃香様？」
ネロの態度の悪さにカチンときた愛紗が更に詰め寄ろうとするも桃香に止められる。

「昨日、ネロさんは屋根の上で見張りしてくれてたんだよ…」

「桃香様、そういうことはもう少し早く…申し訳ありません」
愛紗は頭を下げる。

「そこで爆睡してる髭は少しでも悪魔の気配がしたら飛び起きる。
だから俺は見張りなんて必要ないし、やってない。謝られても困る。
昔から団体行動ってやつが大の苦手だね、一人が好きなんだ」
ネロは少々バツが悪そうに答える。

「そういうことにしておきます」
星はネロを見て楽しそうに笑う。

「なんだよ？」

「手合わせしたら相手がどんな人間か、少しだけわかりますぞ」

「趙雲殿、勝負の結果は？」

「いや、恥ずかしながら手も足も出ませんでした。その代わり、
手や足の出し方を少々、手直ししてもらったので大きな収穫になりましたぞ」

「ネロ殿！是非、私にも御教示願います！」

「鈴々と勝負なのだ！」

「断る」

「なっ、何故！？」

「俺が教えられる事なんてないし、タダ働きなんて御免だね」

「ネロお兄ちゃん、趙雲とは手合わせしたのにズルいのだ！」

「槍持った女に朝から追っかけ回されてホントいい迷惑だ…さっさと逃げればよかった」

「ふむ…関羽殿、朝食の後にでも一つ手合わせしませんかな？」

「趙雲殿が…望むところ！」

「じゃあ、ネロお兄ちゃんは鈴々と勝負するのだ！勝負なのだ！」

「ハア、わかったよ…気が向いたらな」

「ネロさん貴重な薬のおかげで足の怪我也癒えました、ありがとうございます」

楽進は頭を下げる。

「俺はダンテに渡した後のことは知らないし、礼を言われてもなんのこともわかんねえよ」

「あはは、凧はこういう性格やねん。それにダンテさんにちゃんと礼をする練習も兼ねとるんや」

「凧ちゃんは照れて真っ赤になってちゃんと話せなくなっちゃうの」

于禁と李典は楽進をからかう。

「ああね、頑張れよ」

「ち、ちち違います！誤解です！ネ口さんも納得しないでください！沙和！真桜！！！！／／／」

「風い、また赤くなつとるで」

「風ちゃんは顔に出やすいの」

「~~~~ツツ／／／」

「寝不足か？オッサンのイビキがうるさかったなら濡れ布巾でもかけてやればよかったのに」

ネ口はやや呆れ顔で騒いでいる様子を眺めた後、グッタリしている郭嘉と椅子に座ったまま器用に眠る程立に視線を向けた。

「ぐうー……zzz」

「いえ、そうではなく…その、私達は恥ずかしながら軍師の端くれです。で悪魔に有効な策を考えているうちに朝に…風が寝ているのは何時ものことなので御心配には及びません」

「へえ、頭が良いと思ってたけど軍師だったのか？なるほどね」

「まだ実戦経験もない半人前です。結局、良い策も浮かびませんでした……」

「悪魔との戦い方なんて教科書にないし、聖書や呪い書に載ってるのは大概嘘っぱちだ。いいぜ、フォルトウナのでよければ教えてやる」

「是非、教えてほしいのですよ」

「風、いつから起きていた？」

「……………ぐうー」

「寝るな！！」

「その代わりに、この国の地理・風土・貨幣・戦争・噂なんかを教えてください」

「願ったり叶ったりなのですよ」

「口頭でいいか？こっちの文字はさっぱり読めなくてな」

「構いません、ではまず〜」

ネロと二人の軍師は一时间ぐらしかけて互いに持っている知識を交換した。

「ありがとう、参考になったよ。説明つてのはどうにも苦手でさ、悪いな」

「いえいえ、とてもわかりやすかったですよ」

「ネロさんは何処かで兵法を学んだことがありで？」

「10歳で騎士団に入ってから、ずっと悪魔相手に切った張ったで兵法どころか、まともに義務教育すら受けてない。なんか気になったか？」

「いえ、実に計算され無駄のない策なのでてつきり名のある軍師に師事したことがあるのかと…」

「フォルトゥナの騎士は悪魔から一般市民を守るのが仕事だ。優秀な奴から俺みたいなの落ちこぼれまで町の地図・市民の誘導・悪魔との戦闘、この三つは徹底的に教え込まれる。じゃないと仕事にならないからな」

「落ちこぼれどころか、とても優秀なですよ」

「そんなこと言われたのは始めてだ。お世話として受け取っとくよ、軍師殿」

ネロは小さく笑った。

「ネロ殿、余りお喋りに熱中しているとご飯が冷めてしまいますぞ。それとも、小さな女子が好みですか？」

「すぐ行く…って、俺にそんな性癖はない」

「ネロさん、いけません…しかし抵抗も虚しく獣のように襲い掛かり服をブハッ！」

「詰め物をしてトントンしましょうね、トントン」

「ふがふが」

「…まあいい、気にしたら負けだ。ダンテはまだ寝てるか？」

「張飛殿が先程から揺らしたり頬をつねったりしていますが全く反応ありません」

「ダンテ、朝なのだ！起きるのだー！」

鈴々はダンテに跨がって顔をペシペシ叩いている。

「鈴々、いくらなんでもそれは…」

「でも愛紗ちゃん、ダンテさんずっと寝てるよ」

「……………ZZZ」

ダンテに全く反応はない、起きる気配すらなく、そのままイビキをかいて眠り続けている。

返事がない…まるで屍のようだ。

「昔話であつたな、眠り続ける王子さまをお姫様を接吻して起こすつちゅうのが」

「凧ちゃん！ブチュ〜っといっちゃえなの！」

「は、破廉恥な！それに、その話は王子さまが眠り続けるお姫様を起こす話で…」ツツ／＼／＼」

眠り続けるダンテを弄って女子達は大いに盛り上がっていた。

「ずっとあんな感じですな」

「一応、アンタの意見も聞きたいから起きろダンテ。オッサン！髭！変態親父！チツ…」

ネ口は乱暴に揺さぶってみたが相変わらず眠り続け反応がないダンテに思いつきり舌打ちをした。

「貸せ」

ネロは熱々のお茶と桃饅を桃香から引つたくと

「熱いから火傷しないようにって…ネロさん…え」と、嫌な予感しか…」

ダンテの顎を掴み口を開け熱々の桃饅を押し込みお茶を流し込み、無理やり口を閉めた。

「……ちょ……!!」

女子達の声が見事にシンクロした。

「……!!」

ダンテの体が跳ねるように痙攣する。

「Catch this!」

ネロは痙攣するダンテの頭を右手で掴み、二階の窓から外に投げ捨てた。

「……二階……」

またもシンクロする少女達。

「部屋にはドアから入りなさいってママに教わらなかったのか？」

「酷いぜ坊や。俺の美女の熱いキスで朝を迎える作戦が台無しだ」
ダンテは何事もなかったかのように窓から入ってきた。

「そんなの待ってたら一生起きねえよ。せつかく優しく起こしてやったんだから感謝してほしいぜ。トリッシュの電撃や、レディの眉間に鉛玉のがよかったか？」

「坊やもくらってみるか？あれ結構痛いんだぜ」

「悪魔も尻尾巻いて逃げ出すくらいヤバイ女の前で眠り続けるなんて頭のイカれたジャンキーか、よっぽど鈍感な奴しかいねえよ」

「H A - H A - H A ! さっき食ったのは甘くてイケるな、悪くない」

「ええええええー！！！！」

またまた、シンク口する少女達。

「今日は朝からついてるな！良いことがありそうだ」

「そいつはよかったな。俺は朝から運に見放されてるぜ、本当に最悪だ」

何事もなかったかのように話始めるネロとダンテ。

「愛紗ちゃん、常識ってなんだっけ？アツツ！うゝ、舌火傷しちゃった……」

「私にもわからなくなってきました……桃香様、お水を」

「そんなことより！今はご飯なのだ！ご飯を食べたらネロお兄ちゃんと勝負するのだ！」

「Damn it」

「星殿、ダンテ殿とネロさんではどちらが強いのでしょうか……？」

「ダンテ殿だ。間違ひなく一騎当千、いや……万に匹敵するであろう」

ネロ殿が強さの次元が違うと言っていた」

「星ちゃんに、そう言わせるほど強いのにちっとも感じさせない、不思議な人達なのですよ」

程立は視線を向ける。

「昨日は、無理矢理手合わせに付き合わせてしまったあげく怪我の治療までしていただき本当になんとお礼を言ったらいいか…」

「なんのことだ？ まっ、どうしてもってんなら部屋で二人っきりの時にな。期待していいんだろ？」

ダンテはウインクをする。

「う、御冗談を！ わわ私は武骨者ですし…その…／／／／」

「武骨？ こんなに良い女なのか？ 刺激があるから人生は楽しい、俺はそう思ってる。何事も経験だぜ、男も女もな」

「あうあうあうあう……きゅー／／／／」

ダンテの言葉について楽進は真っ赤になって倒れた。

「風ちゃん、深呼吸ヒーヒーなの！」

「沙和、それちゃう！ しっかし、ダンテさん風はこういうのに慣れてへんねん手加減したってや」

「ちょっと刺激が強すぎたか」

ダンテが起床して更に騒がしい1日が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9898x/>

恋姫無双～外史に降り立った悪魔狩人～

2011年12月17日03時01分発行